

### 3 豆 類・そ ば

#### (1) 要 旨

平成16年産の豆類（乾燥子実）の収穫量は、大豆が16万3,200t、らっかせいが2万1,300tで、前年産に比べてそれぞれ6万9,000t（30%）、700t（3%）減少した。一方で、小豆は9万500t、いんげんは2万7,300tで、前年産に比べてそれぞれ3万1,700t（54%）、4,300t（19%）増加した。

また、大豆の田畑別の収穫量は、田作大豆は12万6,100tで前年産に比べて7万1,900t（36%）減少したものの、畑作大豆は3万7,100tで前年産に比べて2,900t（8%）増加した。

平成16年産そばの収穫量（主産県）は、2万400tで前年産に比べて6,400t（24%）減少した。

（表3-1）

表3-1 平成16年産豆類（乾燥子実）及びそばの収穫量（全国）

区 分	作付面積	10a 当たり 収 穫 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参考) 10a 当たり 平均 収 穫 量 対 比
				作付面積		10a 当たり収量		収 穫 量		
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比		
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	
大 豆	136 800	119	163 200	△15 100	90	78	△69 000	70	68	
小 豆	42 600	212	90 500	600	101	151	31 700	154	132	
いんげん	11 800	231	27 300	△1 000	92	128	4 300	119	126	
らっかせい	9 110	234	21 300	△420	96	101	△700	97	100	
そ ば	43 500	…	…	0	100	…	…	…	…	
うち、主産県	41 300	49	20 400		100	75	△6 400	76	…	

注：(参考)の10a 当たり平均収量対比とは、10a 当たり平均収量（過去7か年の実績値のうち、最高、最低を除いた5か年の平均値）と当年産の10a 当たり収量との対比である。（以下の統計表において同じ）

#### (2) 解 説

##### ア 大豆（乾燥子実）

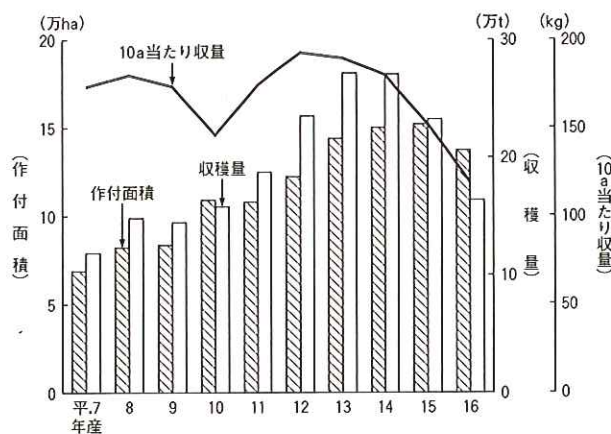
###### (ア) 作付面積

平成16年産大豆の作付面積は13万6,800haで、前年産に比べて1万5,100ha（10%）減少した。

これは、主に田作において水稲や収益性の高い小豆等へ転換されたためである。

（図3-1、表3-2）

図3-1 大豆の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）



(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は119kgで、作柄の悪かった前年産を更に34kg (22%) 下回った。

これは、相次ぐ台風や9月下旬からの長雨等の影響により、登熟が不良となったことや腐敗粒等が多発したことに加え、一部の地域で虫害の発生も多かったためである。

なお、10 a 当たり平均収量対比は68%となった。

(ウ) 収穫量

収穫量は16万3,200 t で、前年産に比べて6万9,000 t (30%) 減少した。

これは、作付面積が減少したことに加え、10 a 当たり収量も前年産を下回ったためである。

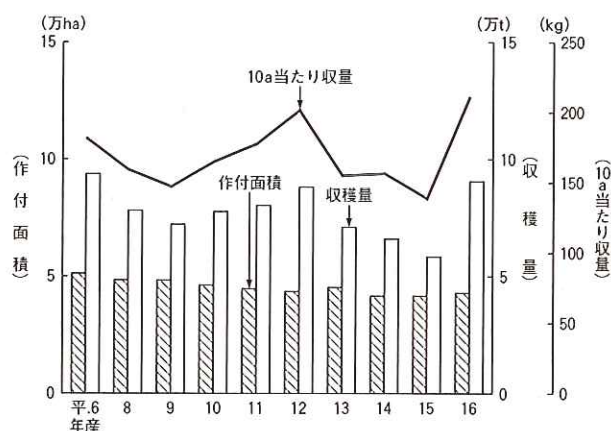
イ 小豆 (乾燥子実)

(ア) 作付面積

平成16年産小豆の作付面積は4万2,600haで、前年産に比べて600ha (1%) 増加した。

これは、都府県において他作物等への転換、生産者の労働力事情等により減少したものの、主に全国の7割を占める北海道において大豆、小麦等から収益性の高い小豆へ転換されたためである。(図3-2)

図3-2 小豆の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移 (全国)



(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は212kgで、作柄の悪かった前年産を72kg (51%) 上回った。

これは、一部地域で相次ぐ台風の影響があったものの、主産地の北海道で生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、生育が順調でだったためである。

なお、10 a 当たり平均収量対比は132%となった。

(ウ) 収穫量

収穫量は9万500 t で、前年産に比べて3万1,700 t (54%) 増加した。

これは、作付面積が増加したことに加え、10 a 当たり収量も前年産を上回ったためである。

## ウ いんげん（乾燥子実）

### (ア) 作付面積

平成16年産いんげんの作付面積は1万1,800haで、前年産に比べて1,000ha(8%)減少した。

これは、主に全国の9割を占める北海道において価格の低迷等により小麦等へ転換されたためである。(図3-3)

### (イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は231kgで、作柄の悪かった前年産を51kg(28%)上回った。

これは、主産地の北海道でおおむね天候に恵まれ、生育が順調であったためである。

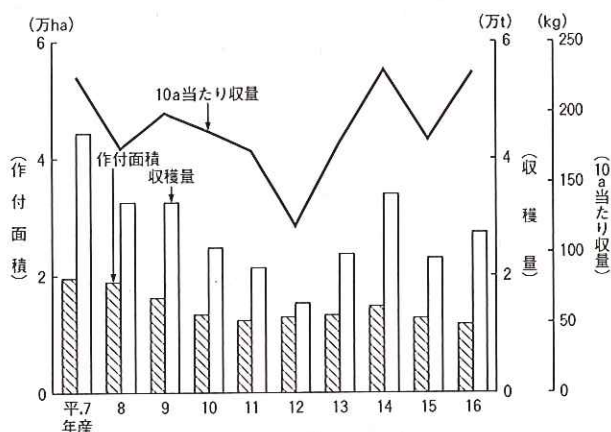
なお、10a当たり平均収量対比は126%となった。

### (ウ) 収穫量

収穫量は2万7,300tで、前年産に比べて4,300t(19%)増加した。

これは、作付面積は減少したものの、10a当たり収量が前年産を上回ったためである。

図3-3 いんげんの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移(全国)



## エ らっかせい（乾燥子実）

### (ア) 作付面積

平成16年産らっかせいの作付面積は9,110haで、前年産に比べて420ha(4%)減少した。

これは、主に全国の7割を占める千葉県において生産者の労働力事情等により減少したためである。

(図3-4)

### (イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は234kgで、前年産を3kg(1%)上回った。

これは、千葉県で9月中旬からの長雨の影響が見られたものの、茨城県で生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、生育が順調であったためである。

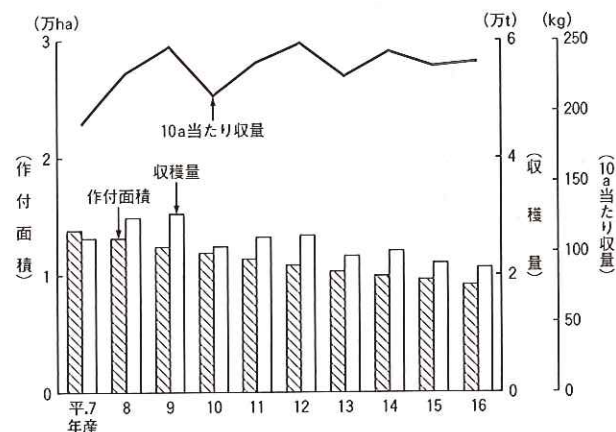
なお、10a当たり平均収量対比は100%となった。

### (ウ) 収穫量

収穫量は2万1,300tで、前年産に比べて700t(3%)減少した。

これは、10a当たり収量は前年産を上回ったものの、作付面積が減少したためである。

図3-4 らっかせいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移(全国)



## オ そば

### (ア) 作付面積（全国）

平成16年産そばの作付面積は4万3,500haで、前年産並みとなった。

これは、北海道において産地づくり対策等により作付けが増加したものの、都府県において水稻  
 等他作物への転換により減少したためである。

### (イ) 10a 当たり収量（主産県）

10a 当たり収量は49kgで、前年産を16kg（25%）下回った。

これは、北海道等で台風や長雨の影響により、倒伏、脱粒等があったためである。

### (ウ) 収穫量（主産県）

収穫量は2万400tで、前年産に比べて6,400t（24%）減少した。

これは、作付面積は前年産並みとなったものの、10a 当たり収量が前年産を下回ったためである。

表3-2 平成16年産豆類（乾燥子実）及びそばの収穫量（全国農業地域別）

農業地域	大 豆				小 豆				い ん げ ん				ら っ か せ い				そば
	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	
	100ha	kg	100t	%	100ha	kg	100t	%	100ha	kg	100t	%	100ha	kg	100t	%	100ha
全 国	1 368	119	1 632	68	426	212	905	132	118	231	273	126	91	234	213	100	435
北 海 道	170	233	396	104	319	258	823	132	106	246	261	126	-	-	-	-	148
都 府 県	1 198	103	1 236	61	107	...	...	...	12	...	...	...	91	234	213	100	287
東 北	369	111	411	69	36	...	...	...	2	...	...	...	0	...	...	...	120
北 陸	167	82	137	49	7	...	...	...	1	...	...	...	1	...	...	...	44
関 東・東 山	169	155	262	83	21	...	...	...	7	...	...	...	82	...	...	...	74
東 海	95	103	98	75	3	...	...	...	0	...	...	...	3	...	...	...	4
近 畿	73	115	84	77	13	...	...	...	0	...	...	...	0	...	...	...	6
中 国	69	80	55	58	15	...	...	...	1	...	...	...	0	...	...	...	14
四 国	15	69	11	53	3	...	...	...	0	...	...	...	0	...	...	...	4
九 州	240	75	179	39	9	...	...	...	0	...	...	...	5	...	...	...	22
沖 縄	-	-	-	-	-	-	-	-	0	...	...	...	0	...	...	...	-

## 4 かんしょ

### (1) 作付面積

平成16年産かんしょの作付面積は4万300haで、前年産に比べて600ha（2%）増加した。

これは、九州において醸造用等の契約面積が増加したためである。

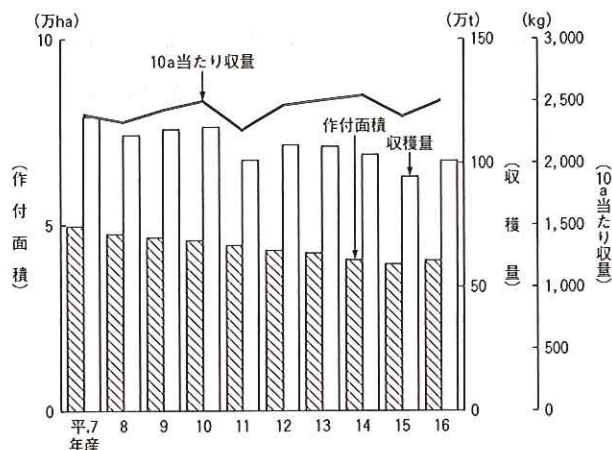
### (2) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は2,500kgで、前年産を130kg（5%）上回った。

これは、6月中旬から8月中旬が高温・多照に経過し、いもの肥大がおおむね順調であったことから、その後の相次ぐ台風等の影響はみられたものの、作柄の悪かった前年産を上回ったためである。

なお、10a 当たり平均収量対比は101%であった。

図4-1 かんしょの作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移



### (3) 収穫量

収穫量は100万9,000 tで、前年産に比べて6万7,900 t（7%）増加した。

これは、作付面積が増加したことに加え、10a 当たり収量も前年産を上回ったためである。

表4-1 平成16年産かんしょの収穫量（全国・主な県）

区分	作付面積	10a 当たり収量	収穫量	前年産との比較						(参考) 10a 当たり平均収量対比
				作付面積		10a 当たり収量		収穫量		
				対差	対比	対比	対比	対差	対比	
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	
全 国	40 300	2 500	1 009 000	600	102	105	67 900	107	101	
うち、鹿児島	12 600	3 000	378 000	800	107	104	37 000	111	99	
茨 城	7 100	2 720	193 100	90	101	110	20 000	112	108	
千 葉	5 430	2 420	131 400	△ 70	99	100	△ 2 300	98	99	
宮 崎	2 260	2 610	59 000	160	108	105	6 900	113	101	
熊 本	1 270	2 360	30 000	△ 20	98	113	3 000	111	100	
徳 島	1 250	2 350	29 400	0	100	107	1 900	107	104	
静 岡	1 060	2 080	22 000	△ 50	95	103	△ 300	99	100	

## 5 飼料作物

### (1) 要 旨

平成16年産牧草の収穫量は3,072万3,000 t で、前年産に比べて202万3,000 t (7%) 増加した。

このうち、いね科のみの収穫量は1,082万1,000 t、まめ科といね科のまぜまきは1,967万6,000 t で、前年産に比べてそれぞれ56万4,000 t (5%)、145万1,000 t (8%) 増加した。

青刈りとうもろこしの収穫量は465万9,000 t で、前年産に比べて9万6,000 t (2%) 増加した。

ソルゴの収穫量は119万4,000 t で、前年産に比べて11万8,000 t (9%) 減少した。

主産県における青刈りえん麦の収穫量は23万9,700 t で、前年産に比べて8,100 t (4%) 増加した。

(表5-1)

表5-1 平成16年産飼料作物の収穫量(全国)

区 分	作付(栽培)面積 ha	10aあたり収 kg	収 穫 量 t	前 年 産 と の 比 較						(参考) 10aあたり 平均収量 対 比
				作付(栽培)面積		10aあたり収量		収 穫 量		
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比		
牧 草	788 300	-	30 723 000	△ 9 700	99	-	2 023 000	107	-	
うち、いね科のみ	256 300	4 220	10 821 000	700	100	105	564 000	105	100	
錫杖いね科まぜまき	526 300	3 740	19 676 000	△10 200	99	110	1 451 000	108	104	
青刈りとうもろこし	87 400	5 330	4 659 000	△ 2 700	97	105	96 000	102	101	
ソ ル ゴ	20 800	5 740	1 194 000	△ 800	96	95	△ 118 000	91	89	
青 刈 り え ん 麦	7 700	...	...	△ 500	94	...	...	...	...	
うち、主 産 県	6 460	3 710	239 700	△ 320	95	(103)	(8 100)	(104)		

注：青刈りえん麦のうち、主産県の前年産との比較の( )内の数値は、主産県のうち北海道を除いた前年産と同じ調査対象県の比較による。

### (2) 解 説

#### ア 牧草

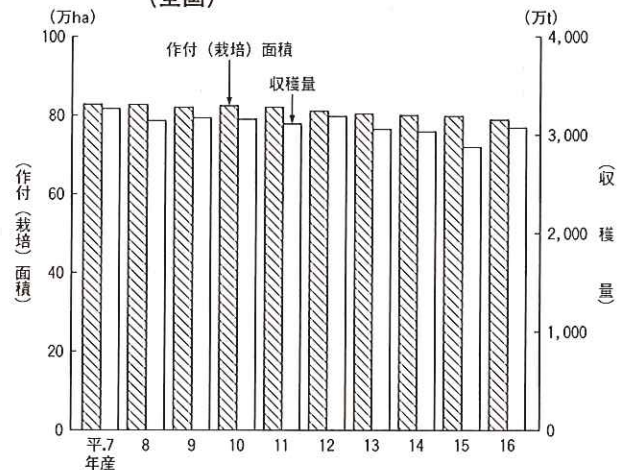
##### (ア) 作付面積

平成16年産牧草の作付(栽培)面積は78万8,300haで、前年産に比べて9,700ha(1%) 減少した。

なお、栽培形態別にみると、いね科のみの作付けが25万6,300haで前年産並み、まめ科といね科のまぜまきが52万6,300haで前年産に比べて1万200ha(2%) 減少した。

(表5-1)

図5-1 牧草の作付(栽培)面積及び収穫量の推移(全国)



(イ) 10 a 当たり収量

いね科のみの10 a 当たり収量は4,220kg、まめ科といね科のまぜまきは3,740kgで、前年産をそれぞれ210kg (5%)、340kg (10%) 上回った。

これは、生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、生育が順調であったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は、いね科は100%、まめ科といね科のまぜまきは104%であった。

(ウ) 収穫量

収穫量は3,072万3,000 tで、前年産に比べて202万3,000 t (7%) 増加した。

このうち、いね科のみの収穫量は1,082万1,000 t、まめ科といね科のまぜまきは1,967万6,000 tと、前年産に比べてそれぞれ56万4,000 t (5%)、145万1,000 t (8%) 増加した。

これは、10 a 当たり収量が前年産を上回ったためである。

イ 青刈りとうもろこし

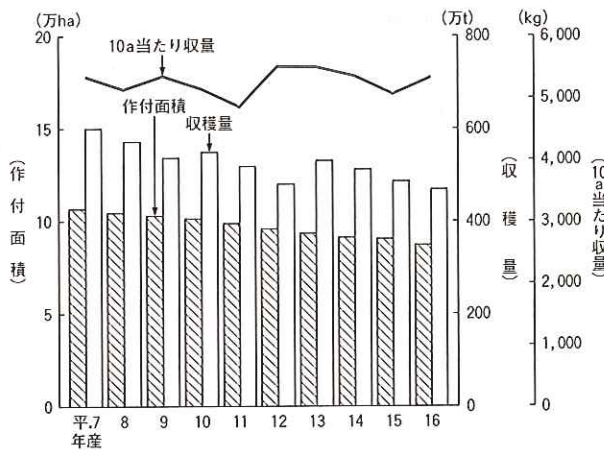
(ア) 作付面積

平成16年産青刈りとうもろこしの作付面積は8万7,400haで、前年産に比べて2,700ha (3%) 減少した。

これは、乳用牛や肉用牛の飼養戸数及び頭数の減少等によるものである。

(図5-2)

図5-2 青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移 (全国)



(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は5,330kgで、前年産を270kg (5%) 上回った。

これは、九州を中心に台風の影響があったものの、北海道、東北及び関東・東山で、

生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、生育が順調であったためである。

なお、10 a 当たり平均収量対比は101%であった。

(ウ) 収穫量

収穫量は465万9,000 tで、前年産に比べて9万6,000 t (2%) 増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したものの、10 a 当たり収量が前年産を上回ったためである。

## ウ ソルゴー

### (ア) 作付面積

平成16年産ソルゴーの作付面積は2万800haで、前年産に比べて800ha（4%）減少した。これは、乳用牛や肉用牛の飼養戸数及び頭数の減少等によるものである。（図5-3）

### (イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は5,740kgで、前年産を330kg（5%）下回った。

これは、産地の九州で、台風の影響による倒伏、茎葉の折損等があったためである。

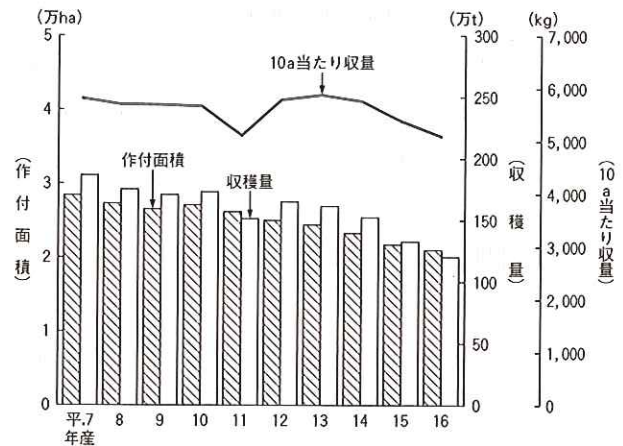
なお、10a 当たり平均収量対比は89%であった。

### (ウ) 収穫量

収穫量は119万4,000tで、前年産に比べて11万8,000t（9%）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加え、10a 当たり収量が前年産を下回ったためである。

図5-3 ソルゴーの作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（主産県）



## エ 青刈りえん麦

### (ア) 作付面積

平成16年産青刈りえん麦の作付面積は7,700haで、前年産に比べて500ha（6%）減少した。

これは、主に他作物への転換等があったためである。なお、主産県（計）の作付面積は6,460haで、前年産に比べて320ha（5%）減少した。

### (イ) 10a 当たり収量

主産県の10a 当たり収量は3,710kgで、前年産を100kg（3%）上回った。

これは、生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、生育が順調であったためである。

### (ウ) 収穫量

主産県における収穫量は23万9,700tで、前年産に比べて8,100t（4%）<sup>(注)</sup>増加した。

これは、作付面積は前年産に比べて減少したものの、10a 当たり収量が前年産を上回ったためである。

（注）平成16年産より主産県に北海道を追加した。このため、収穫量の前年産対比は、北海道を除いた調査対象県で前年産と比較した。）



## 6 工芸農作物

### (1) 要 旨

#### ア 茶

平成16年産茶の摘採延べ面積は10万1,900haで、前年産に比べて5,100ha（5%）増加した。

また、生葉収穫量は46万5,000 t、荒茶生産量は10万700 tで、前年に比べてそれぞれ3万2,600 t（8%）、8,800 t（10%）増加した。（表6-1、2、3）

#### イ てんさい

平成16年産てんさいの作付面積は6万8,000haで、前年並みとなった。

収穫量は465万6,000 tで、前年産に比べて49万5,000 t（12%）増加した。（表6-4）

#### ウ さとうきび

収穫面積は2万3,200haで、前年産に比べて720ha（3%）減少した。

収穫量は118万7,000 tで、前年産に比べて20万2,000 t（15%）減少した。（表6-5）

#### エ こんにゃくいも

主産県（栃木・群馬）における平成16年産こんにゃくいもの栽培面積は4,260ha、収穫面積は2,400haで、前年産に比べてそれぞれ190ha（4%）、50ha（2%）減少した。

主産県における収穫量は6万7,100tで、前年産に比べて8,600t（15%）増加した。（表6-6）

#### オ い

主産県（福岡・熊本）における平成16年産「い」の作付面積は1,800haで、前年産に比べて70ha（4%）減少した。

主産県における収穫量は2万700 tで、前年産に比べて200 t（1%）増加した。（表6-7）

### (2) 解 説

#### ア 茶

##### (7) 栽培面積

平成16年の茶の栽培面積は4万9,100haで、前年に比べて400ha（1%）減少した。

これは、鹿児島県及び宮崎県において清涼飲料としての緑茶需要の高まりから規模拡大が図られ増加しているものの、主産県である静岡県を始めとするその他の地域で生産者の労働力事情等により傾斜地などの栽培条件不利地を中心に廃園が進んだためである。

表6-1 茶の栽培面積

区 分	単 位 : ha	
	栽 培 面 積	専 用 茶 園
平.16年産	49 100	47 600
15	49 500	47 800
前年産対比 (%)	99	100

##### (4) 摘採延べ面積

平成16年産茶の摘採延べ面積は10万1,900haで、茶飲料等の需要の高まりから前年産に比べて5,100ha（5%）増加した。（表6-2）

(ウ) 生葉収穫量

生葉収穫量は46万5,000 tで、前年産に比べて3万2,600t (8%)増加した。

これは、摘採延べ面積が増加したことや、二番茶以降おおむね天候に恵まれ生育が順調であったことによる。

なお、一番茶は1月から4月の少雨等により芽伸びが抑制されたことや、4月下旬の凍霜害等の影響により減少した。(表6-2)

(エ) 荒茶生産量

荒茶生産量は10万700 tで、前年産に比べて8,800t (10%)増加した。

また、茶種別にみると、普通せん茶の生産量は7万800 tで、前年産に比べて3,700 t (6%)増加した。(表6-2、3、図6-1)

図6-1 荒茶生産量

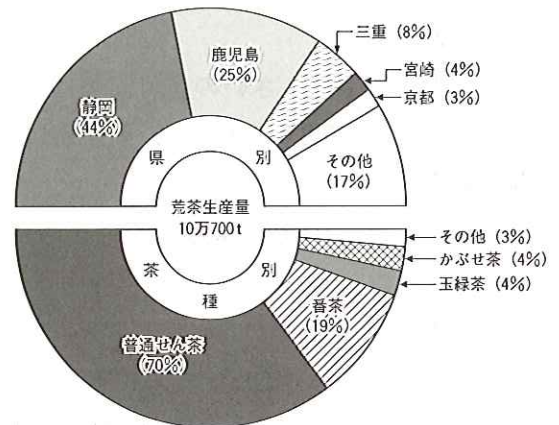


表6-2 摘採面積、生葉収穫量及び荒茶生産量

区分	摘採面積 (ha)		10a 当たり生葉収量 (kg)			生葉収穫量 (t)			荒茶生産量 (t)		
	実面積	延べ面積	一番茶	二番茶		一番茶	二番茶		一番茶	二番茶	
平.16年産	43 900	101 900	1 060	443	490	465 000	194 200	151 900	100 700	40 700	31 900
15	44 600	96 800	970	469	458	432 400	208 800	137 400	91 900	43 300	28 400
前年産対比 (%)	98	105	109	94	107	108	93	111	110	94	112

表6-3 茶種別荒茶生産量

区分	単位: t								
	計	玉露	かぶせ茶	てん茶	普通せん茶	玉緑茶	番茶	その他	
平.16年産	100 700	213	3 740	1 490	70 800	3 930	19 300	1 370	
15	91 900	208	3 910	1 420	67 100	3 490	14 500	1 240	
前年産対比 (%)	110	102	96	105	106	113	133	110	

## イ てんさい

### (ア) 作付面積

作付面積は6万8,000haで、前年産並みとなった。(表6-4、図6-2)

### (イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は6,850kgで、前年産を720kg (12%) 上回った。

これは、生育期間を通じて天候に恵まれ、初期生育が順調であったことに加え、9月以降も高温気味に経過し根部の肥大が進んだことによる。

なお、10a 当たり平均収量対比は120%であった。(表6-4)

### (ウ) 収穫量

収穫量は465万6,000tで、前年産に比べて49万5,000t (12%) 増加した。

これは、作付面積は前年産並みであったものの、10a 当たり収量が前年産を上回ったためである。(表6-4、図6-2)

図6-2 てんさいの作付面積及び収穫量の推移

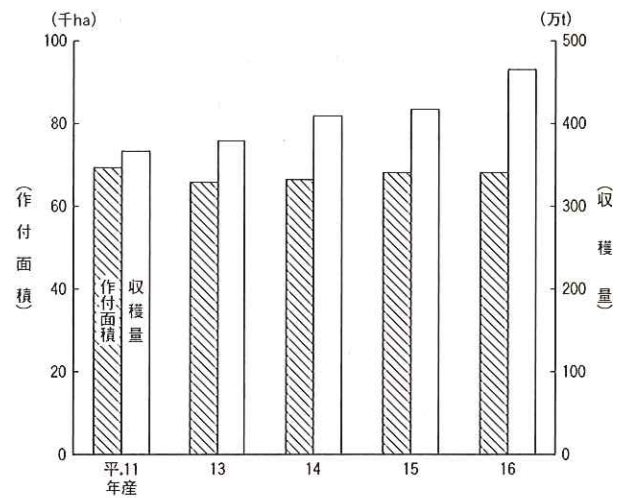


表6-4 てんさいの作付面積及び収穫量

区 分	作付面積	10a 当たり収	収穫量	前 年 産 と の 比 較						(参考) 10a 当たり 平均収量 対 比
				作付面積		10a 当たり収量	収 穫 量			
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比		
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	
北 海 道	68 000	6 850	4 656 000	100	100	112	495 000	112	120	
北海道内訳	札幌	6 710	6 690	449 300	△110	98	102	4 500	101	121
	函館	3 700	6 440	238 100	△ 60	98	111	21 000	110	124
	帯広	30 300	7 010	2 122 000	300	101	117	323 000	118	122
	北見	27 300	6 750	1 847 000	0	100	108	147 000	109	117

## ウ さとうきび

### (ア) 収穫面積

収穫面積は2万3,200haで、前年産に比べて720ha（3%）減少した。（表6-5、図6-3）

これは、病害虫の発生や台風等の影響により萌芽不良や生育不良となったほ場で、株の更新や他作物へ転換があったためである。

表6-5 さとうきびの作型別栽培・収穫面積、収穫量及び10a当たり収量

区 分	栽培面積 (ha)	収 穫 面 積 (ha)				10 a 当 たり 収 量 (kg)			
		計	夏 植	春 植	株 出	計	夏 植	春 植	株 出
全 国 平.16	32 000	23 200	8 270	3 830	11 100	5 120	6 090	4 240	4 690
平.15	33 300	23 900	8 420	3 920	11 600	5 810	6 910	4 890	5 310
前年産との比較 (%)	96	97	98	98	96	88	88	87	88
鹿 児 島	12 100	9 550	2 150	2 070	5 340	5 310	6 640	4 800	4 960
前年産との比較 (%)	96	97	97	96	97	94	91	93	96
沖 縄	19 900	13 600	6 120	1 760	5 740	5 000	5 900	3 590	4 450
前年産との比較 (%)	96	97	99	100	95	84	87	79	81

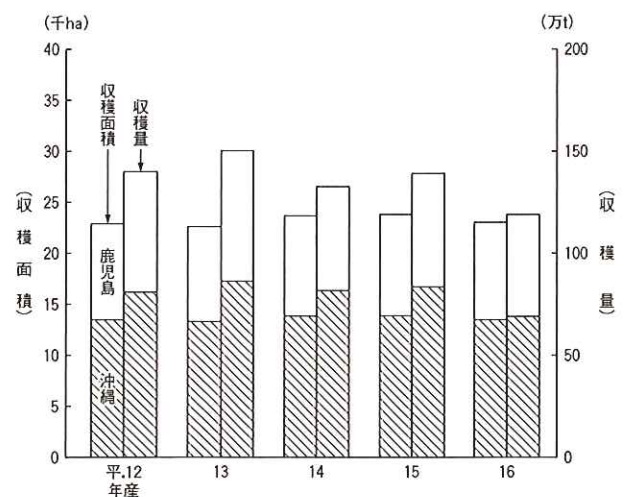
区 分	収 穫 量 (t)			
	計	夏 植	春 植	株 出
全 国 平.16	1 187 000	504 000	162 500	520 500
平.15	1 389 000	581 500	191 500	616 200
前年産との比較 (%)	85	87	85	84
鹿 児 島	506 900	142 700	99 300	264 900
前年産との比較 (%)	91	89	89	93
沖 縄	680 100	361 300	63 200	255 600
前年産との比較 (%)	82	86	79	77

### (イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は5,120kgで、前年産を690kg（12%）下回った。

これは、8月から10月にかけての相次ぐ台風により、茎葉の折損・裂傷、潮風害等の被害が大きかったためである。（表6-5）

図6-3 さとうきびの収穫面積及び収穫量の推移



### (ウ) 収穫量

収穫量は118万7,000tで、前年産に比べて20万2,000t（15%）減少した。

これは、作付面積が減少したことに加え、10a 当たり収量も前年産を下回ったためである。

（表6-5、図6-3）

## エ こんにゃくいも

### (ア) 栽培面積・収穫面積

主産県における平成16年産こんにゃくいもの栽培面積は4,260ha、収穫面積は2,400haで、前年産に比べてそれぞれ190ha（4%）、50ha（2%）減少した。（表6-6、図6-4）

表6-6 こんにゃくいもの栽培・収穫面積及び収穫量

区分	栽培面積	収穫面積	10a当たり収	収穫量	前年産との比較				(参考) 10a当たり平均収量対
					栽培面積	収穫面積	10a当たり収	収穫量	
	ha	ha	kg	t	%	%	%	%	%
主産県計	4 260	2 400	2 800	67 100	96	98	117	115	110
栃木	251	143	2 640	3 770	97	97	101	98	115
群馬	4 010	2 260	2 800	63 300	96	98	118	116	109

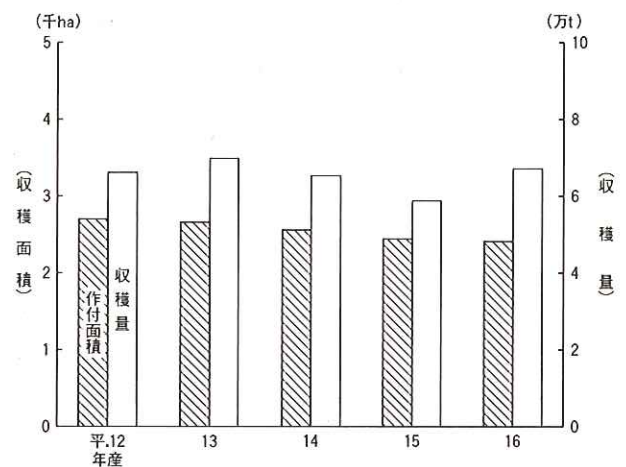
### (イ) 10a当たり収量

主産県における10a当たり収量は2,800kgで、前年産に比べて410kg（17%）増加した。

これは、生育期間を通じて天候に恵まれ、生育及び根部の肥大とも順調であったためである。

なお、主産県の10a当たり平均収量対比は110%であった。（表6-6）

図6-4 こんにゃくいもの収穫面積及び収穫量の推移（主産県）



### (ウ) 収穫量

主産県における収穫量は6万7,100tで、前年産に比べて8,600t（15%）増加した。

これは、収穫面積が減少したものの、10a当たり収量が前年産を上回ったためである。

（表6-6、図6-4）

オ い

(ア) 作付面積

主産県における作付面積は1,800haで、前年産に比べて70ha（4%）減少した。

これは、他作物への転換等によるものである。

（表6-7、図6-5）

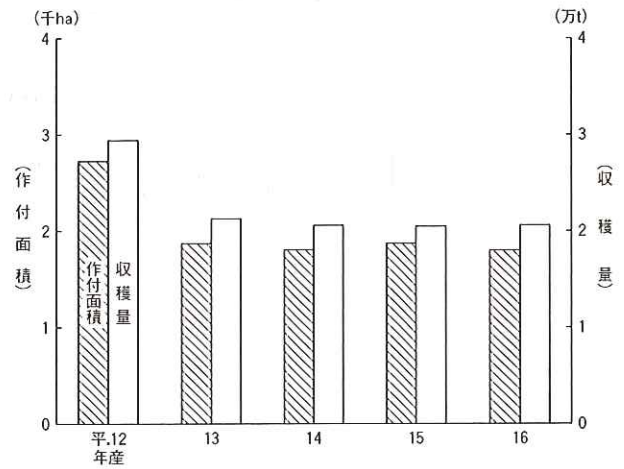
(イ) 10a 当たり収量

主産県における10a 当たり収量は1,150kgで、前年産に比べて50kg（5%）増加した。

これは、初期生育において根の発育が良好であったこと、また、5月の日照不足の影響により茎の伸長がやや抑制されたものの、その後の天候に恵まれ生育が促進されたためである。

なお、主産県の10a 当たり平均収量対比は105%であった。（表6-7）

図6-5 「い」の作付面積及び収穫量の推移（主産県）



(ウ) 収穫量

主産県における収穫量は2万700tで、前年産に比べて200t（1%）増加した。

これは、作付面積は減少したものの、10a 当たり収量が前年産を上回ったためである。

（表6-7、図6-5）

(エ) 畳表生産農家数及び畳表生産量

主産県における畳表生産農家数は1,180戸で、畳表生産量は780万枚であった。

表6-7 「い」の作付面積及び収穫量（主産県）

区分	い生産農家数	作付面積	10a 当たり収	収穫量	前年産との比較					(参考) 10a 当たり平均収量対比	畳表生産農家数	畳表生産量	
					作付面積		10a 当たり収量		収穫量				
					対差	対比	対比	対比	対差				対比
	戸	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	戸	千枚	
主産県計	1 260	1 800	1 150	20 700	△ 70	96	105	200	101	105	1 180	7 800	
福岡	81	77	1 130	872	△ 12	87	114	△ 10	99	101	80	422	
熊本	1 180	1 720	1 150	19 800	△ 60	97	105	200	101	105	1 100	7 380	